

## ある少女の旅

久野 昭

ひとま

先ずは、学者を輩出すること多く、代々文章博士、侍読、大学頭などに任じられてきた菅原氏の、わけても秀才の誉れ高かった右大臣菅原道真から数えて五代目にあたる菅原孝標たかすえを父とし、藤原倫寧ともやすの女子むすめで『蜻蛉日記』の作者として著名な道綱母を姉に持つ女性を母として生まれた女子の、少女期の記憶を辿ることにしたい。

当時、少女は「あづま路ぢの道のはてよりも、なほ奥つかた」(『更級日記』からの引用は岩波文庫版に拠る)にいた。彼女十歳のとき、すなわち後一条天皇の寛仁元年(二〇一七年)に、父親の孝標が上総介に任じられていたからである。

上総介という役職からすれば、その居宅は上総国の国府、国分寺ともにそこに置かれていた今日の千葉県市原市に在ったであろう。

一九七六年から翌年にかけての上総国分寺台遺跡調査で、稲荷台一号古墳から銀象嵌の「王賜」銘鉄剣が出土したことは記憶に新しいところだが、その古墳が位置し、また縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代前期、そして奈良・平安時代をピークとした集落の、だから藤原孝標が上総介だった時代も集落の存在した痕跡の残っていた市原市山田橋あたりに、もし孝標一家が住んだとすれば、当時なら東京湾が間近かに望めたはずだ。その海の先、ほとんど真西の方角のはるか彼方には富士の嶺が聳える。眺望にも、また新鮮な食物にも恵まれた土地である。だが、彼女が生まれ、懂れている京へは、いかにも遠い。ここは、「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかた」なのである。

彼女の実母は京に残っていた。継母と一緒だった。その継母は一家が京に戻ると家を出て、今度は実母と暮らすことになる。だが、

それはもう少し後の話である。いまは父親と継母に兄と姉、そして乳母がいた。

血筋から見ても、彼女が多感な文学少女であっておかしくない。

当時の物語文学が、彼女を惹いていた。「世の中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなる晝ま、宵ゐななどに、姉繼母などやうの人々の、その物語、かの物語、光る源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふまゝに、そらに、いかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師佛をつくりて、手あらひなどして、人まにみそかに入りつゝ、「京にとくあげ給ひて、物語のおほく候ふなる、あるかぎり見せ給へ」と、身をすてて額をつき、祈り申したと、彼女は後年、『更級日記』に書いている。

都に上つて物語を心行くまで読みたいという願いの実現されるのは、父親の任期が終了して一家が都に帰り着いた寛仁四年（一〇二〇年）末のことになる。彼女十三歳のときである。十歳から十三歳までを、京への、また京に流行る物語への憧憬の思いのうちに、彼女は過ぎした。「人まにみそかに入りつゝ」、その思いを薬師如来像に訴えながら。

東京湾を見下ろす台地に建っていたであろう上総介の居宅は、寝殿造りだったであろうか。当地では無論、高官なのである。京から派遣された身分の高い地方行政官の権威にもかかわらう。そう貧弱

な建物ではなかったであろう。

「門出したるところは、めぐりなどもなくて、かりそめの茅屋の、しとみなどもなし。簾かけ、幕などひきたり」と、『更級日記』にあるのは、一家がいよいよ京に立ち戻るに当たって、それまでの居宅から一旦別の場所に移つて後旅立った、その仮の宿の描写である。それまでの普段の住まいが寝殿造りだったにしても、言うまでもなく、この時代、まだ寝殿も東西の対屋も、内部は板敷きである。間仕切りもほとんど無かつたはずだ。柱と柱の間隔は十尺ほどだったろうか。その縦横の柱間一つの空間が「ひとま」である。

有職故実の教科書どおりの建物がそうそうざらに存在したとも思えないが、型通りならば、建物の一番外側の簀子とよばれる廻り縁の内側に、一段と高く廂があつて、ここも居間、客間などの居住空間としての役割を担つてはいた。だが、廂に薬師如来像が置かれていたとは、ちょっと想像しにくい。少女が「みそかに」、家の者に内緒でそつと入り込むこともできない。仏像が安置されていたのは廂の内側の柱の列から更に内部、つまり母屋に属する空間だったと見る方が自然である。その母屋と廂との境目には、襖があつたらうか。それとも、ただ御簾だけだったらうか。

その外側、廂と簀子との境を成すのは、おそらく引き戸の形式の部戸でなく、上下二枚から成る部戸だったであろう。黒塗りの格子の裏に板を張った部の上半分は長押から釣り金具で吊られ、昼間は内

側に水平に引き上げられる。下半分は嵌めたり外したりできる形式になつていたろう。この工夫が眩しすぎる日光を遮ったり、激しすぎる風雨を防ぐ。ただし、西洋建築風の壁面とは基本的に違う。この日本建築においては、内部空間はごく自然に外部空間に連なりうる。外の風をいつでも内に取り込むことができる。たとい廂の奥に襖という間仕切りがあつたにしても、これとて、いとも容易に開閉できるのである。

もつとも、主として休養のための空間だつた母屋内部は、かなり暗かつたであろう。おそらく檜皮葺ひわだだつたであろう屋根が、その緩やかな斜めの面を、周囲の柱の外部へぐつと押し出す。その屋根に覆われた内部空間の更に内側である。天井はまだない。見上げれば、暗さに慣れた眼に、屋根の勾配がそのまま映る。そのような「ひとま」で、少女が等身の薬師像の前に額ぬかづく。いや、ひたむきに都の物語の世界を憧れていた彼女にとつて、それは仏像ではなかつたろう。仏そのものだつたであろう。いま、ここに薬師如来がまします。それは薬師如来ではあるが、当時でははや、たんなる治病のための崇拜の対象ではなかつた。現に、この早熟な少女の願ひも病ひの平癒ではなかつた。

時は藤原氏が政界の頂点に居座つていた時代である。私たちの国の歴史上、造仏が最も多く行われた時代でもあつた。それは都だけの現象ではない。京を遠く離れた地方にも、仏像造詣の流行は及ん

でいた。また、造形される仏の本願とは無関係な願ひが、その仏像に託されることも珍しくなかつたであろう。

『更級日記』の筆者の誕生より百三十年ほど後のことだが、藤原頼長が『臺記』の康治元年（一一四二年）八月六日の条に「僕少年養猫、有疾、即畫千手像、祈之日請疾速除愈」と、自分の飼っている猫の病気の平癒を千手観音の画像に祈願した少年のことを書いてゐる。この少年は、ついでにその猫が満十歳まで生きるように願つた。猫の病氣は癒り、しかも満十歳まで生きた。「知此菩薩靈驗新」と頼長はその条に書いてゐる。造仏の盛んだつた藤原時代を通じて、人間たちはこの類の勝手な願ひを、仏それぞれの専門とは無関係に、仏たちに引き受けさせようとしていた。菅原孝標むすめの女もその例外でなかつたという見方も成り立つ。

願ひ叶つて一家が京に戻れると決まつたとき、少女はいかに悦んだことだろうか。いかに仏に感謝したことだろうか。十三歳の九月、いよいよ旅立つことになる。夕刻である。「日の入りいぎはの、いとすごくきりわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まにはまるりつゝ、額ぬかをつきし薬師佛やくしほつのたち給へるを、見すてたてまつる悲しくて、人しれずうち泣かれぬ」。

泣いてしかるべきである。他のどの仏でもなく、この仏に少女は祈つた。彼女の祈りに応えたのは、この仏であつた。いま、この仏に彼女は訣れねばならぬ。そして、この仏のおわします「ひとま」

を後にしなければならぬ。

それは容易に外部空間とも、また他の「ま」とも連なりうる「ひとま」だったには違いない。だが、余人はともかく、少なくとも彼女にとっては特別の意味を持つ、他とは異質な空間だったはずだ。いわば、日常のうちなる異界だったのである。

## 薬師 仏

涙でその異界に訣れを告げた少女は、京への途中、大井川を渡る。駿河と遠江との境である。「大井川といふ渡あり。水の、世の常ならず、すり粉などを、濃くして流したらむやうに、白き水、早く流れたり」。

物語本に飢えていた彼女が書物を貪り読むのはもう少し後、入浴してからである。まして、二百年ほど前に成立した本だが、仏教説話集である『日本靈異記』など、読んではいなかったであろう。奈良の薬師寺の僧景戒の撰になるこの日本最古の仏教説話集は、その中巻第三十九条で、淳仁天皇の天平宝字二年（七五八年）、この大井川の上流の鵜田うだの里に起こったという靈異を記している。

鵜田の里の川辺の砂中から「我を取れ、我を取れ」という声が聞こえる。偶然それを聞いた旅の僧が、砂に埋めた死人が生き返ったのかと思って「掘りて見れば、薬師佛の木像あり、高さ六尺五寸、左右の耳缺けたり」。僧侶は「知識を引き率、佛師を勸請して、佛

の耳を造らしむ。鵜田の里に堂を造りて、尊像を居多、もちて供養す。今號けて鵜田の堂と曰ふ。この佛像、驗ありて光を放ち、願ふ所能く與ふるが故に、道俗歸敬す」（引用は角川文庫版に拠る）。

これまた薬師如来像である。その仏像、靈驗あらたかたで「願ふ所能く與ふる」のだ。何が願われ、与えられたか、治病・施薬だけではなかったであろう。それを含めて一般に現世利益の仏として、薬師如来は崇拜されていた。菅原孝標女が一刻も早く京に上って物語を読めるようにと祈ったとしても、不自然ではなかった。十歳から十三歳までの僅か四年にも満たない辛抱で平安の都に戻れたのも、薬師仏の御利益かも知れない。いや、そうに違いないと、少女は思っていたであろう。

彼女は十歳のとき、任地に下向する父孝標に随って京都を出たのだった。まさか「貴人多忘事」を気取っているのではなく、記憶になかったのか、誌すほどの出来事もなかったのか、それとも書きたくなかったのか、『更級日記』には、彼女が幼い日々を過ごしたはずの都についての記述はない。いま自分が都に向かつて上っている道を四年前には逆に下ったという記憶のあったことは、たとえば浜名の橋が「下りし時は黒木をわたしたりし、この度は、跡だに見えねば、舟にて渡る。入江にわたりし橋なり」という記述からも明らかなの。

冒頭で自らを「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ

いでたる人」とよび、富士山を仰いで「わが生ひいでし國にては西おもてに見えし山なり」と説明する。あたかも上総に生まれ出た田舎人と自認しているような書きようである。いま上りつつある京が久しく恋い焦がれてきた全く未知の土地、ただし長く求めつづけてきた自らの魂の故郷でもあるような書きぶりである。

「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかた」の仮宅の「ひとま」にひそかに入つて、西への旅の実現を薬師仏に祈願した少女は、いま、世の常ならぬ白い水の流れる大井川を越えて西方に向かつている。

祈願された薬師仏は、仏国土の果てよりも、なお奥つかた、はるかなる東方の浄瑠璃世界の至尊である。だからこそ、薬師如来が衆生を西方浄土へと導きたまうという発想が、いつの頃からか、私たちの国の薬師信仰のなかにはあった。ひょっとして、表象が重ならなかったであろうか。彼女がその華やかさに憧れてきた都での生活に幻滅を抱くのは、もっと後のことである。女人往生にかかわる教会上の議論などとはまるで無縁のところだ。言わせてもらえば、少女にとって、宮廷の女性たちの優雅な生活が華麗に描いてみせる京の都は、一種の浄土、安楽世界ではなかったか。しかも、それは上総の国府から遠望する富士の高嶺の、更に遥けき西方にあった。いま、彼女の祈った薬師仏の導きで、少女は西方安楽浄土を目指す。

とすれば、十三歳の女子にはそこまでの意識はなかったらうが、

これもまた、ある日常のうちなる異界から、ある非日常の他界への旅であった。

だが、その旅は現実には楽なものではなかった。たとえば上総を出て下総に入つて泊まった庵に、その「庵いほなども浮きぬばかりに」降りつける豪雨の「恐ろしくてもねられず」とか、下総と武蔵の境での出産の身の穢れのため、しばし「離れて別にのぼる」ことになった乳母への「いと戀し」い思いとか、「おそろしげに暗がりわた」った足柄山の麓の「えもいはず茂りわたりて恐ろしげ」で、「まいて山の中の恐ろしげなる事はむ方なし」とか、大井川を渡つて遠江にかかったあたりで「いみじくわづらひ出でて」、「いみじく苦しければ、天ちうといふ河」、おそらくは天竜川「のつらに、假屋作り設けたりければ」、そこに逗留して、やっと病気の方は癒つたものの、「冬深くなりたれば、河風けはしく吹き上げつゝ、堪へ難くおぼえけり」とか。

そういう難儀を重ねて一行は京に辿り着くのだが、その直前、「粟津にとゞまりて、師走の二日京に入る。暗くいき着くべくと、申まをの時ばかりに立ちて行けば、關ちかくなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふ物」、横に板を何枚か重ねて作った垣のことだが、その垣の「上かみより、丈六の佛のいまだ荒作りにおはするが、顔ばかり見やられたり、あはれに、人離れて、いづこともなくておはする佛かなと、うち見やりて過ぎぬ」。

申の時と言えば今日の午後四時。ただし師走だから、夕刻と言ってもいい。京師への東からの入り口である逢坂の関の手前で、「きりかけ」の垣の前を通ったのは何時ごろだろうか。その垣越しに丈六仏の顔だけが、薄ら闇のなかに見える。

丈六とは一丈六尺。髪際までの高さがおよそ四メートル八十五センチに当たる。釈迦の身長が、周尺で八尺とされる常人の身長の倍あったとの信仰による。周尺と日本の曲尺とでは長さに差があって、周尺は曲尺の約四分の三に当たるが、両者はあまり厳密に区別されず、この四メートル八十五センチという数値は日本式尺度（曲尺）での計算である。その丈六仏と等身仏とが、藤原時代の造仏の基本だった。たとえば同じこの年の春、寛仁四年三月二十二日、ということとは菅原孝標一家がまだ任地上総にいた時期だが、当時すでに出家の身だった藤原道長は、法成寺阿弥陀堂（無量寿院）で、金色に眩い丈六阿弥陀如来坐像九体の開眼供養を行っている。

「きりかけ」はそう背の高いものではなからう。他方、仏像の方は丈六である。立像なら五メートル近く、坐像でその半分の高さになる。半分でも、かなり高い。それなのに、顔から下が見えなかったのは、それが坐像だったけれども、ただし少女の眼の位置が低かったからだろうか。それとも、立像だったけれども、木割り、木寄せとよばれ、仏師康尚が基礎を築き、その子定朝が完成させたといわれる造仏技術、すなわちそれぞれ一定の割合の寸法に切った木材

で像の各部分を「荒作り」した後、その要所に柄を入れて膠か漆で繋ぎ、細部の仕上げにかかるという造仏法の、まだはじめの段階で、その顔から上の部分が台の上にも載っていて、その大きさをら丈六と推測したのか。

いずれにせよ、「顔ばかり見やられた」のなら、当然、頭部は見えたはずだ。しかし、宝冠台の上に変化面、更にその上に頂上仏面が載っていたのならともかく、「顔ばかり見やられた」「荒作り」の仏の姿からその仏を特定することは、十三歳の少女には無理といえるものである。完成した薬師如来像だったら、頭頂に肉の隆起があり、眉間に白毫が付いていたろうが、頭と顔だけにしても、「いまだ荒作りにおはする」し、闇も迫っている。しかと確かめられたとも思えない。それは薬師仏だったかもしれないが、また他の仏だったかもしれない。

ただし、この逢坂山に差し掛かって関所も間近になった道の際の垣越しに仏像の頭部を見たとき、少女は上総の国の住まいの母屋の「ひとま」、あの昼間も薄暗かった異界に残してきた等身の薬師仏のことを、憶わなかったであろうか。「あはれに、人離れて、いづこともなくておはする佛かな」の詠歎が、もう少しで終わろうとするこの京への旅に自分を送り出したもうた等身の薬師仏にも向けられていたとしても、一向におかしくないのである。

ともあれ、この「きりかけ」によってこちら側から区切られ、そ

の「ぎりかけ」越しに仏像の頭部のみを仰ぐことのできた空間にも、この鋭敏な少女は、日常のうちなる異界を感じ取ったはずなのである。

### 阿弥陀仏

藤原道長の住まいは京極殿とよばれていた。その京極殿の隣り、東京極大路の東で鴨川の西岸、北は土御門大路、南は近衛大路に面した広大な地に、法成寺は建立された。先ず阿弥陀堂が建てられた。はじめ中河御堂とも京極御堂ともよばれたが、後に無量寿院と呼称されるようになる。右に触れた九体の丈六阿弥陀如来坐像の開眼供養の年、従って菅原孝標一家の入洛の年には、阿弥陀堂だけだった。後に金堂、講堂等が建てられる。それらを含めて、この一大伽藍が法成寺の名をもってよばれるのも、無論、我々の女主人公が京に上ってから後のことだ。

「まづは、つくらしめたまへる御堂などのありさま、かまたりのおとゞの多武峯・不比等の大臣の山階寺・基經のおとゞの極樂寺・忠平の大臣の法性寺・九條殿の楞嚴院・あめのみかどのつくりたまへる東大寺も、ほとけばかりこそおほきにおはすれど、猶この無量寿院にはならびたまはず」、「兜率天の一院を」移造した「天竺の祇園精舎を」「うつしつく」った「唐の西明寺の一院を」さらに「此國のみかど」が「うつさしめ給へ」る大安寺よりも「たゞいまは、な

をこの無量寿院まさり給へり」という具合に、『大鏡』は、他のさまざまな寺院に較べて無量寿院がいかに優れているかを述べている（引用は岩波文庫版に拠る）。「難波の天王寺など、聖徳太子の御こゝろにいれつくり給へれど、なをこの無量寿院まさり給へり。奈良は、七大寺・十五大寺などみくらぶるに、なをこの無量寿院いとめでたく、極樂浄土のこのよにあらはれけるとみえたり」。

かく『大鏡』が激賞している「無量寿院」が、かりに、ただその名でよばれるようになった阿弥陀堂のみならず法成寺全体をさすにしても、この阿弥陀堂が法成寺の豪華絢爛を代表するものだったことは、否めまい。そして、この阿弥陀堂、すなわち無量寿院は、阿弥陀如来坐像を中にして左右に同一形式の阿弥陀如来像を四体ずつ配置する、いわゆる九体阿弥陀像という様式の先駆けでもあった。この阿弥陀堂、そしてそこに安置された九体阿弥陀像を、少女が都に上ることになる年の春には、道長は完成せしめていた。

この阿弥陀堂は法成寺境内の西寄りにあった。引き続き建立された東寄りの薬師堂と、対をなす位置である。薬師堂に安置されたのは、無論、薬師如来である。

この二つの堂の東西の位置関係は、阿弥陀如来のまします西方極樂浄土と薬師如来のおわします東方瑠璃光浄土との位置関係に対応するものであろう。もとより、西方浄土にせよ東方浄土にせよ、浄土は現世ではない。現世は穢土なのである。未法思想を背景に、源

信の『往生要集』などによって、厭離穢土・欣求浄土の念がしきりに掻き立てられていた時代だった。阿弥陀堂、薬師堂ともに、その欣求さるべき浄土の、雑駁な言い方をしてしまえば、本来この世に現出するはずのない世界の現世の見本だったではあろう。ただし、それがこの世における他界の見本にすぎなかったにしても、なお堂内が日常的空間、日々の生活の場からは厳然と区別されるべき異界だったこと、言うまでもない。

その異界を、たしかに、この十三歳の少女は訪れてはいない。しかし、それがいかに荘嚴にして華麗であったにしろ、それと、京を夢見ていた彼女が薬師仏に祈るためにひそかに入るのを常としたあの上総の館の、おそらくはかなり貧相だったろう「ひとま」とのあいだには、その規模においてでなく、この異質性において、どれだけの相違があったであろうか。彼女にとっては、そこも、それなりに仏堂たりえたはずなのである。

無量寿堂を建立した藤原道長は、堂内の九体阿弥陀如来像の開眼供養を行った年から七年の後、万寿四年（一〇二七年）十二月四日、同じ堂内で薨じることになる。「佛の相好にあらざるより外の色を見むとおぼしめさず、佛法の聲にあらざるより外の聲を聞かんとおぼしめさず。後生の事より外の事をおぼしめさず」と、『榮華物語』は臨終目前の道長を描写してみせる。「御眼には阿彌陀如来の相好を見奉らせ給、御耳にはかう尊き念佛をきこしめし、御心には極樂を

おぼしめしやりて、御手には彌陀如来の御手の絲をひかへさせ給て、北枕に西向に臥させ給へり」（引用は日本古典文學大系版に拠る）。さらにその四半世紀後には、世は末法の代に突入するであらう。

阿弥陀仏も薬師仏も、如来である。その「如来」という呼称の元になったサンスクリット原語の解釈には諸説あるにしても、中国仏教という漢語の「如来」は、概して、真如（如）から衆生の世界に來た（來）者の意に解されていたはずである。真如の世界、真実の世界を浄土に求めるなら、如来は浄土からの來訪者である。浄土への導き手は如来を措いて存在しない。死期の迫った藤原道長の手にしかと握られ、その手を丈六阿弥陀如来坐像の手に結び付けている糸には、この大入道殿の浄土への熱い憧憬がこめられていたにちがいない。

道長薨去の年には、少女はもう二十歳に達していて、少女期に抱いた京への夢はとうに消え失せていた。都で味わわねばならなかった幻滅の、いかに深く、味気なかったことだろう。そして、さらに後年、同じ幻滅の続くなかで、彼女は阿弥陀仏來迎の夢を見ることになる。天喜三年（一〇五五年）十月十三日の夜、彼女四十八歳の冬である。

さすがに命は憂うれきにも絶えず、ながらふめれど、のちの世も、思ふにかなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたきに、頼むこと一つぞありける。天喜三年、十月十三日かみなづきの夜の夢に、ゐたる所



の屋のつまの庭に、阿彌陀佛たち給へり。さだかには見え給はず、霧ひとへ隔たれるやうに、透きて見え給ふを、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮花の座の、土をあがりたる高さ三四尺、佛の御丈六尺ばかりにて、金色に光り輝やき給ひて、御手かたつかたをばひろげたるやうに、いま片つかたには、印をつくり給ひたるを、異人の目には見つけ奉らず、我一人見たてまつるに、さすがにいみじく、け恐ろしければ、簾のもと近く寄りても、え見奉らねば、佛、「さは、この度は歸りて、後に迎へに來む」とのたまふ聲、わが耳一つに聞えて、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ、後の頼みとしける。

この一段の書き出しからも、不運の重なりの中、もう彼女にとって現世に期待すべきものがほとんど皆無だったろうことは、察しがつく。頼りとしては、この阿彌陀如来の來迎の夢ひとつ。表象としては、末法第二年の天喜元年（一〇五三年）三月四日、関白藤原頼通によって供養された宇治平等院の阿彌陀堂すなわち鳳凰堂に安置された仏師定朝の作、丈六阿彌陀如来坐像か。

だが、これは無論ずっと後年、少女が期待に胸ときめかして京に向かつてから三十五年も経って後の話である。その間の彼女の不運、苦労を辿ることが本稿の意図ではない。この後年の彼女の浄土への志向も、主題ではない。いまの我々の関心は、十三歳の少女が京へ

の旅にひそかに思い入れた意味にある。

その旅の起点と、ほぼ終点に近いところに、仏がまします。はじめは薬師如来である。後の方は、時代からすれば阿彌陀如来か薬師如来の可能性きわめて大きいものの、仏としかわからない。当時すでに仏師のギルド的な集団、いわゆる仏所は組織されていたであろう。治安二年（一〇二二年）には法成寺金堂の造仏の功によって仏師として最初の法橋の位階を賜る榮譽を得ることになる定朝は、そのような仏所の統率者、すなわち大仏師だった。逢坂の関のすぐ東に見た「きりかけ」の向こうは、そのような仏所に属する作業場でもあったろうか。

『更級日記』には、寛徳二年（一〇四五年）の「霜月の廿日、石山にまゐ」った記述がある。「雪うち降りつゝ、道のほどさへをかしきに、相坂の關を見るにも、昔越えしも冬ぞかしの思ひ出でらるゝに、そのほどもいと荒う吹いたり。

相坂の關のせき風吹く聲はむかし聞きしにかはらざりけり

關寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり荒造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、年月の過ぎにけるもいとあはれなり」。

この関寺の御仏こそ、かつて顔のみの見られた荒造りの仏と読み取るのは、いかにも軽率だろう。日記の筆者三十八歳。ほぼ正確に四半世紀もの年月が過ぎている。場所はほぼ同じとしても、二十五

年前の夕暮れにその前を通った「きりかけ」が関寺の垣だったとの証拠はないし、まして、その折りに夕闇のなかに顔のみを見た仏が実は関寺の本尊になったと保証するものは何もなからう。

## 物 語

ここで、もう一度、「あづま路ぢの道のはてよりも、なほ奥つかた」、上総国の国府、国分寺に近いところに在ったであろう上総介菅原孝標の居宅に戻ろう。

今日では東京湾岸は埋め立てられ、工場地帯になっている。湾岸に沿って走っている国道十六号線を、千葉市を経て市原市に入っても、右手に海を見ることは、川を渡る一瞬を除いては至難なのである。だが実は、昔なら湾岸でなく湾内を走っていることになる。旧道は、この重化学工業の発達につれて拡大した京葉工業地帯の核心部を縫う幹線よりも、もっと左手を通っている。

上総国分寺台に出るには、国道十六号線から左折し、旧道を含む数本の道路を横切り、鉄道線路の上の跨橋を渡っても、なおしばらく走らねばならない。養老川と村田川に挟まれた南北約七キロ強、東西約四キロ弱の三角形に近い市原台地の南西側が国分寺台であって、上総国府はこの台地の周辺部、海岸平野側の低地に在ったと推定されている。とすれば、それは今日の市原市役所から程遠からず、だから、上総介の居宅を市役所から程遠からぬ国分寺台の、平安時

代にも集落のあった市原市山田橋あたりと想像しても、あながち無理ではあるまい。

海が見えた、と、過去形で言わねばならぬのが残念である。その海を隔てた向こうが相模である。その相模に出るにも、この上総から下総、武蔵を通して行かねばならない。さらにその先には駿河、遠江、参河、尾張、美濃、近江と、いくつもの国が続いていて、平安の都は気の遠くなるくらい、はるか彼方であった。

その都についての記憶が、どの程度、この少女に残っていたであろうか。父孝標に随いて彼女が上総国に下ったのは、十歳の時である。数え年にせよ十歳なら、ある程度の記憶は残っている。それなのに、まるで生まれも育ちも上総、それまでの都を見たこともなかったかのような『更級日記』の書きようは、なぜだろう。幼い少女にとっての都の経験など、どうせ、たかが知れたものだとも解りきりである。代々、大学頭や文章博士を出した家系なのに、父親の孝標だけは、不運だったためか、それとも他に何か理由あったか、職に恵まれず、暮らしも低かった。だから幼い娘には華やかな都で生活したという実感が欠けていたのだとも説明できよう。だが、それだけであろうか。

「あづま路ぢの道のはてよりも、なほ奥つかた」の任地に来て、ともかく上総介という職を得た父親のことは措くとしても、他の家族に鬱々とした思いがあったらうことは想像に難くない。受け止め方は、

たとえば兄と姉とは違っていたらう。と言うよりも、口には出さね、各々が生活環境の変化を各々なりに受け止めていたはずである。それは、とりわけ女たちにとっては、激変と言っていい変化だったであろう。なぜ実母が夫と行を共にしなかったか、一家が京に戻ったとき、今度は継母が家を出ることになったのか、そういった疑問に関して『更級日記』には何の記述もないが、それもこの激変と無関係でないかもしれない。

ともあれ、「つれづれなる晝ま、宵ぬなどに、姉繼母などやうの人々の、その物語、かの物語、光る源氏のあるやうなど、ところどころ語る」とき、彼女らの胸に、自分たちの生まれ育った都への熱い憶いのあつたろうこと、その思いが物語の一節を語ることで増幅されていったらうことも、これまた想像に難くない。

では、彼女らの「語るを聞くに、いとどゆかしさまされど」、「いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師佛をつく」った少女の方はどうだったらう。

彼女自身、薬師仏が欲しいと父親にねだったのか、それとも誰か家人の願いだっただか、『更級日記』の記述では彼女自らの発案と読めるが、いずれにせよ、もう当時はこの土地でも、たとい組織的な仏所はまだ未発達だったにしても、造仏はかなり盛んに行われていたはずである。どうせ任地での生活が一生のあいだ続くわけでもなく、丈六ほどではないにせよ、都に戻る時には運搬不可能に近い、

そして事実残していくことになった等身仏を仏師に造らせたことからも、当時の造仏の流行が窺える。上総一家の造仏の動機が、ただ少女の「京にとくあげ給ひて、物語のおほく候ふなる、あるかぎり見せ給へ」という願いとは別のところにあつたと見る方が、おそらくは自然かもしれない。

ただし、いまはこの文学少女の側の願いについて言えば、はたして、いくつも存在する物語本を全部読破したいという、この記述の額面通りに、それだけのものと解していいのだろうか。京に早く行きたいということは、物語を全部読みたいということの前提条件にすぎず、目的はあくまで後者にあつたのか。あるいは、少女の憧れは物語を読むことだけに限られ、その物語に描かれている女御や更衣のきらびやかな生活をめざすものではなかったと、言い切れるだろうか。

無論、その更衣たちの勤務の場である後宮が、そもそも女性にとつてどのような意味を持つのかとか、女御が、また更衣もだが、天皇の寝所でどのような勤めを要求されるのかとか、その類の知識は、少女には欠けていたであらう。そのような知識を授けられたときの彼女の反応についての興味とは全く無関係のところ、私はいま、この少女の憧憬を問題にしている。それは、ただ物語を読むことだけにあつたのか。そのためにのみ、京に上りたかったのか。

「その物語、かの物語、光る源氏のあるやうなど、ところどころ」

を継母や姉が語っていた、その「物語、かの物語」が何だったかは判然としないが、当然、『源氏物語』に先立つ一連の物語文学が考えられる。ほとんどすべてが作者不詳だが、平安時代の貴族社会のありようを伝える。和歌を軸にした短編百二十余編から成り、在原業平の一代記とも取れる『伊勢物語』、かくや姫が貴公子たちの求婚に無理難題で応じた後に自分の故郷である異界に戻っていくのを、この世の者には所詮とどめるすべもない『竹取物語』、貴族たちの学問や芸術とのかかわりに主眼を置くその前半部の語り口は『竹取物語』に近いが、貴族社会における恋愛を描写するその後半部は『源氏物語』の先駆けとも取れる『宇津保物語』（『空穂物語』）、継母に虐められてきた姫君、落窪の君が貴公子によって倅せを得る『落窪物語』、等。それらを承けて、「光る源氏のあるやう」を伝える紫式部の『源氏物語』が最新の流行作ということになる。これらの物語が少女を魅惑したとすれば、それは何によってだろうか。ここで、継母の許に在るゆえに、わが身を落窪の君に準えようとする少女像を思い描くとしたら、あまりに穿ち過ぎというものだろう。物語の一節を口にすることで懐かしい都を偲んだにしても、物語の世界と現実の世界との乖離を、宮仕えの経験のある継母も、また年齢は不詳だが姉も、充分に心得ていたであろう。京に戻ったからとて、自分が物語中の登場人物たりえないのは、わかりきった事柄である。この少女にだって、それくらいの分別は要求してもいい。

思うに、少女が憧れ、また欲したのは、物語が艶やかに描き出してみせる女御や更衣そのものになることではなかった。彼女は、今様の言い方をすれば、物語に登場するような高貴にして麗しき女たちのファンだったのだ。物語がヒロインとして舞台の正面に押し出し、相手役の貴公子への慕情と、その恋ゆえの苦悩とが彼女たちの運命を美しく織り上げていく女性たちは、彼女にとって、いわばスターだった。そのスターたちと同じ空気を吸うだけで、このファンは満足する。できるだけ同じ空気を吸いたい、吸っていたい。できるだけ近くに居たい。その空気が清浄であることを、ファンは露ほども疑わない。

『更級日記』から窺われる作者の性格が、あまり現実直視型ではなく、その強い個性が現実との妥協を拒んで、むしろ、自分の直面する不運な現実の境遇では充たされぬものを夢想の世界に求めた、とは、しばしば指摘される場所である。たしかに、そういうところがある。そして、そのような性格はこの上総国で暮らした少女期から頭れつつあったであろう。すでにして、恵まれた境遇とは言えぬ。その不運な現実との折り合いをつけるよりは、彼女なりの疎外感のなかで、少女は物語の世界にのめりこんでいく。その世界をきらびやかに彩るスターたちに、自分の夢を託する。自分が物語のヒロインでないことぐらい、少女にだって分かっている。自分に代わってヒロインが優雅に振る舞い、その一途な恋を貴公子が、たとえば光

源氏が優しく受け止めてくれればいい。そのためにも、ヒロインと同じ空気を吸っていなければならなかつたらう。

この少女が夢見た世界は、もう、彼女が日頃経験している現実の世界からすれば、異質の世界である。「京にとくあげ給ひて」と彼女が薬師仏に祈願する「京」とは、ただ心ゆくまで物語に読み耽ることができるといふ、幼い少女ですら容易に現実性に転換しうるような可能性を持つ、遠いけれども確実に存在する「京」にはとどまらない。物語に没入していく先には、現実とは異質の世界が開ける。その世界の空気を、少女は胸一杯に吸いたかつたのではないか。現実存在する「京」の奥の夢幻の「京」に、彼女は一步も二歩も踏み込みたかつたのではないか。「人まにみそかに入りつゝ」、その「京」に彼女を導きたまうべき薬師仏に、「身をすてて額をつき、祈り申す」姿は、秘儀を思わせる。そして、秘儀は日常の時空の裂け目でのみ有効なのである。

### 関

薬師仏に、「身をすてて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる」。

ここで「門出」とは、ただ旅立つべく家の門を出ることではない。旅立ちに際して吉日を選び、一旦これまで暮らした家を出て、仮り

の住まいに移ることである。一種の物忌みと解すべきだろう。旅行すべき方向に直ちに向かうことを避けて、別の集落に一旦移る。その仮宅を出るとき、旅が始まる。実際、菅原孝標一家の旅立ちのために移つたのが「いまたちといふ所」であり、その「いまたち」が今日の市原市馬立<sup>うまたた</sup>だったとすれば、「のぼらむ」方向とはむしろ逆に「くだる」ことになる。

もし居宅が山田橋あたりに在つたとすれば、ほぼ今日の国道二九七号に沿つた道を南下したのであろう。途中で養老川を右に見ながら馬立まで、およそ八キロの道程である。旅立つときには、今度は養老川を左に見ながら北上し、そのまま弧を描いて流れる川に沿つて西に向かい、当時の河口近くから東京湾岸の道をあらためて北に向かつて進むということにならうか。

門出は夕暮れであつた。霧が深かつた。「車に乗るとて、うち見やりたれば、人まにはまゐりつゝ、額をつきし薬師佛のたち給へるを、見すてたてまつる悲しくて、人しれずうち泣かれぬ」。

文面からすれば、この等身薬師如来像は立像である。木像とはいへ、やはり「見すてたてまつる」を余儀なくされたのだろう。少女はもう二度とこの薬師仏に会うことはない。長旅ゆえに、道中、いくつかの寺を観、仏を見る機会があつたであろう。だが、十三歳の少女の心に深く痕跡を残した仏は、この「ひとま」の薬師仏と、逢坂の関の手前の「きりかけ」の向こうに顔のみを見た仏とだけであ

った。

「ひとま」の薬師仏の御姿を心の内裡に秘めながら、少女は旅を続けたであろう。門出のための仮宅に移ったときこそ、旅先への期待のなかで、初めての地に見る風景を「いとおもしろし」と捉え、立ち渡る夕霧に「いみじうをかし」と感じた彼女も、じきに旅の苦しさ、辛さを思い知らされる。決して楽な旅ではなかった。その旅の果てなんとする夕暮れ、薄ら闇のなかに拝む仏の顔が、彼女にとって一際印象深いものだったろうことは、容易に想像できるのである。理想への旅が幻滅に終わらねばならぬこと、自分の目指してきた

「京」が現実には清浄な夢幻的世界ではありえず、あまりにも現世的な穢土でしかないこと、自分の吸わねばならぬ空気の汚れを、そのとき、彼女はすでに予感していなかったであろうか。

ここに到るまでに通過した関として、彼女が後に記録するのは、駿河の横走、同じく駿河の清見、美濃の不破の三関である。足柄山を越えているから、当然、足柄の関も通ったはずだが、関のことは書いていない。ということは、ひとつには、当時はすでに関所が有名無実のものになっていたからであろう。

また、ひとつには、足柄山一帯の「おそろしげに暗がりわた」った不気味な印象の強かったためと、それよりも「月もなく暗き夜の、やみにまどふやうなるに、いづくよりもなく出で来た」って、「見る目のいときたなげなきに、聲さへ似るものなく歌ひて、さば

かり恐ろしげなる山中にたちて行」った三人連れの遊女の残した感銘の鮮烈だったためだろう。ここでも、少女は異界を感じ取っていたかもしれない。旅には多少とも日常の世界からの離脱の意味があつて、あたりの光景が異界に踏み込んだ思いをさせるような場面も少なくなかつたらう。ここが少女にとって、そのような場面のひとつだったとしても、おかしくない。また、旅の途上のこの場面に「いづくともなく」出現しては去って行った遊女たちが、日常の世界では出会うはずのない異様な存在、いわば異界からのまれびととして、幼い眼に映じたとしても、不自然ではなからう。

その足柄山を越えてから、はや二ヵ月余り経っていたはずだ。京はもう目前である。少女は逢坂山に差し掛かって「關ちかく」まで来ている。「ひとま」の薬師仏に訣れを告げたのは九月の三日だった。それがいまは十二月の二日、陽の落ちるのは早い。

朝廷が畿内防衛のために東海道は伊勢の鈴鹿、東山道は美濃の不破、そして北陸道は越前の愛発に関を設けたのは、大化二年（六四六年）であった。いわゆる三関だが、いま少女が通過しようとしている逢坂（相坂）の関もほぼ同じ頃に設置され、やがて愛発の関に代わって三関のひとつとして、畿内防衛上の要衝となった。防衛拠点のさらに遠方にも置かれるに及んで、彼女がすでに通過した駿河の横走の関、相模の足柄の関などが設けられ、国家危急存亡の時来るや、固関使が派遣されて関をびたりと閉じることになる。ただし、

これは無論、少女のあずかり知らぬ昔の話である。延暦八年（七八九年）に三関は廃止され、その五年後には、朝廷はいま少女が入ろうとする京都に移った。それから二百年以上も経った寛仁四年（一〇二〇年）のいま、関はその軍事的機能を完全に放棄している。もつとも、関の軍事的役割の消失は、必ずしも、そのまま関屋の消滅を意味するわけではない。『源氏物語』第十六帖も、「關屋」の名を持っている。

少女が『源氏物語』を「一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内にもうち臥して引き出でつゝ見る心地、後の位も何にかはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るよりほかの事な」という状態になれるのは、無論、京に入つた後である。ひょっとしたら以前に継母か姉がこの帖を語るのを聞いたかもしれないが、彼女がここで、光源氏二十九歳の晩秋、九月の晦日、紅葉の色鮮やかに、霜枯れの草一面に叢なす逢坂山での源氏と空蟬との巡り合いの場を連想しえたかどうか、それは分からない。ただ、『源氏』のこの帖が伝えるように、当時、逢坂の関は関所であるよりは、石山詣での折りに通る一様の行楽の地点になっていた。

ただし、いまは、とうに紅葉は落ちてゐる。まして、三条の宮の西なる家に「暗くいき着くべく」と、暗くなつてから着くように、瀬田の西、今日の膳所あたりの粟津を出たのが午後四時頃。「關ちかくなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふ物したる上より、

丈六の佛のいまだ荒作りにおはするが、顔ばかり見やられたり。あはれに、人離れて、いづこともなくておはする佛かなと、うち見やりて過ぎぬ」。

「あはれに、人離れて、いづこともなくておはする」と、この荒作りの御仏について少女が抱いた思ひは、実は彼女自身の内面の、名状しがたい頼りない思ひが仏像に投影されていたのではないか。だから、問うのだ。このとき少女はすでに、その理想とした清浄の世界が現実には穢土でしかないことを、予感していたのではないかと旅が人を変え、三月に及んだ旅が、この十三歳の少女を「あはれに」大人にしようとしていた。ただし、この旅の最後に通つた逢坂の関についての印象を、彼女は「こゝらの國々を過ぎぬるに、駿河の清見が關と、相坂の關とばかりはなかりけり」、これまで多くの國々を過ぎてきたものの最も印象深かつたのは駿河の清見の關とこの逢坂の關だけだったと、後年、書いているにすぎない。言わぬは言うにいやまさる、の類か。

## 伝 説

三ヶ月に及ぶ少女の道中の見聞が、後年記憶を手繰り寄せて記録されたなかに、物語めいた伝説が二つ出てくる。

ひとつは、武蔵の竹芝で里人から聞いた話。国司が土地の者を宮中に衛士として差し出す。その男、禁裏で庭を掃きながら不平を呟

く。「などや苦しきめを見るらむ、わが國に七つ三つくりすゑたる酒壺に、さし渡したるひたえのひさごの、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびきを見て、かくてあるよ」。それを「みかどの御女」に聞かれた。彼女はその酒壺が見たいとせがむ。男は皇女を背に負って武蔵の國に逃げ帰り、後、帝の許しも得て、この竹芝で皇女と暮らしたという伝説である。

もうひとつは、富士川で聞いた話。川上から黄色い紙が流れてくる。拾い上げると、翌年新たに国司が任命されることになっている諸國について、それぞれの國名と新国司の氏名とが朱色で書いてある。「かへる年の司召に、この文に書かれたりし、一つたがはず」。

年が明けての任命は、この紙に書かれた通りになっていた。この駿河國については、任官者名が二人書いてあったのだが、その一人は任官後三ヵ月で死んで、並んで名の記されていたもう一人があらためて国司に任命されたという話である。この伝説は、「いと世に見えぬさま」の富士山から流れ下る川水の不思議な予言の力ということもあろうが、その予言の内容がとりわけ地方行政官の娘にとっては他人事とも思えぬゆえに、かなり印象的だったであらう。

古代律令國家は、諸國をその規模によって大國・上國・中國・下國に分類した。国司として、それぞれに応じて定員の決まった守介・掾、目の四等官が任命され派遣されたが、少女の父菅原孝標は、

このうちの介を上総で勤めた。「すけ」とは四等官のうち長官（「かみ」）を補佐する「次官」のことであり、国司の場合には「介」の字を書いた。

後年のことだが、万寿二年（一〇二五年）、「睦月の司召に、親のよろこびすべきことありしに、かひなきつとめて」、つまりその年の正月の司召のとき、孝標は任官の選に洩れる。長元五年（一〇三二年）になって、やっと常陸介の職を得ることができるよう。

ところで、これら地方官の任期は、大宝令では六年と決まっていたが、平安のこの時代には四年に短縮されている。それは菅原孝標一家の誰もが知っていたはずだ。話題にならなかったとも思われない。何かの折りに話題に出て、それが少女の耳に入っているも、少しも不自然ではない。少女も知っていたと見る方が、おそらく事実に近いであらう。しかし、だからといって、彼女がひそかに「京にとくあげ給ひて」と薬師仏に祈願したことまで、無駄と評していいか。嘲っていいのか。

道中で聞いたもうひとつの伝説、武蔵國から徴用された衛士による皇女の略奪結婚の話の方は、少女が憧れ、その世界の空気の吸えるようにと薬師仏にも祈ってきた、宮廷をめぐる美しい物語の世界のなかに所を得させてもいい。

ここで、池の辺の茂みから、寢殿の前の南庭に注がれた眼を想像してもよからう。寢殿と東の対屋のあいだの渡殿の下には遣水が設



えられていて、その水が廊に沿ってこちらに流れ、この池に注いでいる。寝殿前の東に桜、西に橘を置いてみてもいい。東か西の対屋に皇女が住んでいる。それぞれの対屋から南に廊が延びて、庭を挟む形になる。ここでの表象は、有職故実の教科書通りでも一向に構わないだろう。東の廊のこちらは泉殿、西の方は釣殿になっていて、どちらもこの池に面する。池には中の島もあって、橋が架かっている。

衛士が庭を掃きながら故郷を憶い、酒壺に差し掛けてある直柄ひたえのひさが風に靡くさまを呟いている。それを、「ただひとり」対屋の廂と簀子のあいだの「御簾みすのきはにたち出で給ひて、柱によりかゝりて」聞きながら、「いとあはれに、いかになびくならむと、いみじうゆかしく」思っているのは、これまで「いみじうかしづかれ」て育ってきた、やんごとない「みかどの御女むすめ」である。その姿を、こちらの眼が捉える。これは、そのまま、この少女の憧れてきた世界のなかの一情景たりえたのではないか。

そういうこともあって、強く記憶に残ったのだろう。この伝説はかなり詳細に記録されている。まして、竹芝でこれを聞いたのは、まだ旅立って間もない時期だ。一刻も早く京に上りたいという彼女の思いは、この話を耳にしたことで、一層つったであろう。

「門出のさまを書いたなかに、「車に乗るとて」とある。女性、それも少女だから、当然車に乗っての旅と考えるとよからう。介という

地方官は大国の場合でも正六位下が相場だから、そう贅沢な車ではあるまい。それでも、乗用車はおそらくは網代の屋形に文様の入った車で、御簾も付いていたはずだ。荷を積んだ車も何台かあったろう。牛に牽かれた車が列を組んで、悠然と進む。途中、一箇所は何日も留まることもあったが、それでも、あの皇女がいかつい東男に背負われて一気に武蔵に下ったこの道を、少女は逆にゆっくり都へと上ってきた。物語の世界に近づいてきた。もう京は眼の前である。

## 体 験

だが他方で、どう逃避しようもない現実をも、旅は少女に突き付けている。

すでに竹芝よりも手前、下総と武蔵の境の大井川の上流で、乳母が子を産んだために、少女は乳母から引き離される。その乳母のいる仮屋に、兄が彼女を抱いて連れて行ってくれた。「いと手はなちに、あらあらしげにて、苦くるしみといふ物を一重ひとへうちふきたれば、月残りなくさし入りたるに、紅くれないのきぬ上に着て、うち悩みて臥したる」、苦一枚葺いただけの粗末な仮屋の奥にまで月の光が射し込んでいるなかに、紅の着物を上に掛けて、病み伏している乳母の姿に、少女とて、凄烈な現実を見ざるをえまい。乳母が「うち泣く」。それを「いとあはれに見捨てがたく思へど、いそぎあて行かるゝ心地、いと飽かずわりなし」。その乳母から引き裂かれるようにして連れて

行かれたのが、どうしようもなく不条理なのだ。別れても、その顔が眼の前にちらついて離れない。「面影におぼえて悲しければ、月の興もおぼえず、くんじ臥しぬ」。

少女自身も、遠江に差し掛かったところで、病いに臥せることになる。もう冬も深くなっていた。仮屋で過ごさねばならなかった日々、「けはしく吹き上げ」る川風のいかに身に染み込んだだろう。京を夢見ながらのみ、旅を続けたのではない。現実の不条理を思い知らされつつ、この逢坂の関まで、やっと辿り着いたのだ。

それにしても、「こゝらの國々を過ぎぬるに、駿河の清見が關と相坂の關とばかりはなかりけり」との『更級日記』のあっさりした書きぶりには、どうやら奥があろう。

清見が関については、そこを通ったときの関の情景も筆にされている。「清見が關は、片つ方は海なるに、關屋どもあまたありて、海までくぎぬきしたり。けぶりあふにやあらむ、清見が關の浪も高くなりぬべし。おもしろきことかぎりなし」。関屋などがいくつも並んでいて、柵が海まで続き、その柵の尽きるあたり、海辺は波しぶきで霞んでいる。これは明らかに、眼の捉えた風景である。

だが、逢坂の関の場合はどうだろう。関そのものの情景の描写はない。しかも、どう考えても、菅原孝標一行がこの関を通ったときは、もうかなり暗くなっていたはずだ。そんな時刻に一家がここで行業に時を過ごし、少女がここの光景に感銘を受けたと思う方が無

理というものである。ならば、彼女が清見が関で「おもしろきことかぎりなし」と感じた際の印象と、この逢坂の関での印象とは、違っていないなければならない。なのに、なぜ、ここで二つの関を並べたのだろう。

清見が関の場面には、「くぎぬき」が出ている。柱を並べ立て横木を貫き通した簡単な柵である。逢坂山でそれに対応するのは、関そのものの情景ではないが、関近くの「きりかけ」である。柱のあいだに鎧戸ふうに横板を張った簡単な板塀である。「かりそめなるきりかけといふ物」とあるから、一時の目隠しと解してよからう。

「きりかけ」から「くぎぬき」が連想されたのではないか。「きりかけ」とよばれる塀にせよ、「くぎぬき」と言われる柵にせよ、どちらも囲いである。少女は囲いの外に立っていた。外から囲いの内側を見ている。夕闇に見る御仏の顔と、陽射しのなかに見る関屋とは違う。そんなことは分かっている。逢坂では、「きりかけ」の向こうに彼女は異界を感じ取っていたであろう。切懸は異界の囲いでもあった。常人が踏み込もうとしても、その囲いによって堰き止められる。つまりは堰であり、関である。ここで関の釘貫を連想しても、不自然ではない。

たしかに、記述は十三歳の少女の筆によるものではない。おそらく、五十歳を過ぎてから書かれた。記憶違いもあろう。道中の地名の出てくる順序にも狂いがある。だが、この感じやすい少女の心に

深く焼き付いたものには、さほどの狂いはなからう。清見が関にかかわる記述のうち、彼女の主観を伝えるのは「けぶりあふにやあらむ」と「おもしろきことかぎりなし」とだが、「けぶりあふにやあらむ」、波のしぶきで煙り合うのではなからうかは、推測にすぎない。「おもしろきことかぎりなし」は、端的な評価と評してよからう。

しかし、逢坂山の、右に言った意味での関（堰）の場面での「あはれに、人離れて、いづこともなくおはする佛かな」は、もとより客観的判断ではないが、また、推測でもなければ評価でもない。ここには少女の感動が、おそらく率直に語られている。しかも、それは一時の感動ではあるまい。あの「ひとま」の薬師仏に訣れて、遙けくも上総国から苦勞して辿ってきた旅路のまさに終わらんとする、憧れの京への入り口のすぐ手前で、侵入を拒む困いの向こうに仏の顔を見たときに一気に集約されたこの少女自身の旅の思いが、その仏に投影されているのではないか。

その思いは、この旅のはじめに悲しくも「見すてたてまつ」ったあの薬師仏への憶いでもありえたとに相違ない。だから、「あはれに、人離れて、いづこともなくおはする佛」が後の関寺の本尊であろうとなかろうと、そんな詮索はどうでもいい。「あはれに、人離れて、いづこともなくおはする」という思いそのものが、この少女の全人格にかかわる事柄として、大切なのである。

この仏も、あの薬師仏も、また少女自身も「いづこともなくおはする」、つまり何処というあてもなく存在しているのではないか。たしかに、この荒作りの丈六仏はいま逢坂の関の近くにおわす。

これだけの大きさの仏像ゆえ、完成後に安置されるべき寺もすでに決まっているはずだ。他方、上総国のあの家には、いま誰かが住んでいるであろうか、それとも空き家のままだろうか。まだ誰も住んでいなくても、あの薬師仏がいまあの日のまま、あの同じ「ひとま」におわすことを、少女はいささかも疑わないであろう。そして、彼女自身もいま、彼女の憧れの対象だった目的地の一步手前まで来ている。三者ともに、何処というあてもなく存在しているのではない。そう言える。

しかし、本当にそう言い切れるのだろうか。少女はいま、明確にはないが、人がこの世に在ることの意味を捉えかけているのではないか。

もちろん、孤独な旅ではなかった。父親も継母も、兄も姉も、また旅立って間もない一時はその出産の穢れゆえに別行動を取りはしたものの乳母も、一家揃っての旅であった。京に落ち着いて後も、菅原孝標家としての生活が続くであろう。その限り、少女は決して「人離れて」存在しているのではない。そう言っている。

しかし、はたしてそう言い切っているのだろうか。少女はいま、まだおぼろげにはあるが、人がこの世に生きていくことの意味に

気づきはじめているのではないか。

もしそうなら、以前に「京にとくあげ給ひて、物語のおほく候ふなる、あるかぎり見せ給へ」と祈つた薬師仏も、切懸の向こうに顔のみを見せている仏を媒介にして、いま、新たな意味を持ちはじめている。如来の導きたまうべき、この世ならぬ清浄の地についての少女なりの表象が、すでに変わりはじめている。物語の描き出す華麗なヒロインたちのファンであることを、彼女は辞めたわけではない。入浴後じきに、彼女は憑かれたように『源氏物語』に読み耽ることになるだろう。だが、やはり、このとき彼女はすでに、上総に在った時の少女ではなくなりつつあった。「あはれに、人離れて、いづこともなくておはする佛かな」は、その心の表面を擦って過ぎただけの感銘ではない。それは、人格を揺する類の体験だったはずだ。暗さと寒さのなかに心の震えを隠しながら、この仏を「うち見やりて過ぎ」たときから、その体験をどう受け止めるかが、おそろく少女にとって重い課題になるであろう。

二十五年後の十一月の二十日過ぎ、やはり冬のさなか、石山詣での折りに同じ逢坂の関を通って彼女が詠む「相坂の關のせき風吹く聲はむかし聞きしにかはらざりけり」は、その後の彼女のあまり倅せとは言えぬ世俗の生活の雑音も、このとき少女の幼い胸を駆け抜けて行つた風の響きを消せなかったことを示している。その折りに、切懸の向こうに見た荒作りの御仏の顔の記憶は、その胸に鮮明

に蘇ることになる。

## 逢坂

某年九月三十日、任を終えて都に戻る常陸介一行が、近江の宿を発つて西に向かった。この一行が逢坂の「關入る日しも、この殿、石山に、御願はたしに、まうで給ひけり」。つまり同日、石山詣でのために光源氏の一行が同じ道を逆に東に向かう。そのことを、常陸介は迎えの者から聞く。『源氏物語』の「關屋」の前段の部分である（引用は岩波文庫版に拠る）。

常陸も上総も、大・上・中・下の国々に別のあるうちの大国であり、しかも、ともに親王任国だった。官位の上では、常陸介と上総介は同格である。任地から京に戻る車列の規模にそれほどの差はなかったと見てもいいだろう。

源氏の一行と擦れ違ふとなると、よけい「道の程、さわがしかりなむ物ぞ」ということになる。そこで、常陸介の方は、「まだあかつきより、急ぎけるを、女車おほく、所狭うゆるぎ來るに、日たけぬ」。これで、車列の規模の見当は付く。「打出の濱くるほどに」、源氏がすでに粟田山を越えたとの知らせが入る。そのため、一行は「關山に皆おりて、こゝかしこの杉の下に、車どもかきおろし、木隠に居かしこまりて、すぐしたてまつる」ことにした。逢坂の関のところ、源氏の一行をやりすごそうとしたのである。

徳川本『源氏物語繪巻』では、この場面、左上に遠く琵琶湖が見える。画面中央部から右にかけて逢坂山。右下から岩山を縫うように源氏の一行が中央左手前に来かかる。それを迎えるように牛車。いまは常陸介の妻になっている空蟬の乗った車か。その牛車の奥に常陸介一行が描かれている。その更に向こうの遠景、湖のなかに湾曲しているあたりが「打出の濱」だろうか。

「打出の濱」とは、今日の大津市打出浜であろう。京阪石山坂本線の石場の北、琵琶湖文化館あたりから東にかけての海岸である。その海岸を常陸介一行が通っている頃には、源氏一行は栗田山を越えていた。だから、それぞれかなりの規模の車列の擦れ違いの可能な逢坂の関で、常陸介や空蟬たちは光源氏の通り過ぎるのを待つことにした。この関を抜け、山科から栗田口を経由して京に入るのである。上総介の一行も、同じ経路で都に入ったはずである。

ただし、寛仁四年十二月の上総介一行の入洛は夜であった。「暗くいき着くべく」と、故意に夜間の到着を狙ったのは、なにか制限にかかわる呪術宗教的な問題があったかもしれないが、また、長旅の疲れなり垢なり、なにか他人に見られることを嫌ってのことか。いずれにせよ、「申の時ばかりに」粟津、今日の膳所あたりを発って、常陸介の場合と同様に「女車おほく、所狭うゆるぎ來る」という状態だったとすれば、いや、それほどではなかったにしても、逢坂の関の通過時には、常陸介の場合とは違って、もうかなり暗くなつて

いたに違いない。しかも、少女が荒作りの仏を見たのは、おそらくは車の上からであった。御簾を透かして見たのではないか。それなのに、仏が強烈な印象を彼女に残したのならば、それだけの素地がこの少女にはあったのだ。

逢坂の関で、源氏と空蟬とは直接に逢って言葉を交わすことなく擦れ違う。後に、空蟬が詠む。

逢坂あまがさかの關やいかなる關なればしげきなげきのなかを分くらん  
古来、逢坂の関はしばしば歌中に詠まれている。無論、逢坂の「逢ふ」を男と女の「逢ふ」に掛けてである。畿内の北東の境界をなす防衛上の拠点だった逢坂山の、この関が廃止されても、かなり後まで関屋は残ったし、まして「逢坂の関」の名は、この掛け詞のゆえに、いつまでも残るだろう。

ただし、いまここでは男女が「逢ふ」のではない。少女にとって、は、仏との「逢坂（相坂）の關」であった。偶然の出会いとはいえず、この仏との逢坂の意味は彼女にとって、ずしりと重い。

旅の起点、門出に当たって薬師仏と訣れたのは、「日の入りぎはの、いとすぐくきりわたる」なかであった。日の沈むころ、いわゆる「彼は誰たれ」時であり、「誰たそ彼かれ」時である。黄昏に迫りくる闇は、感じやすい少女の心を揺する。しかも、怖ろしいほどに霧がたちこめていた。御簾も外され几帳なども取り片付けられた、がらんとした家の中に、薬師仏が立っていた。

いま、車に揺られながら旅の最後の夜を迎えようとしている少女は、もう逢坂山にかかっている。その地形から言っても、時刻を考へてみても、闇が迫っていたであろう。ふと山側を見れば、仮設の「きりかけ」の上から丈六仏の顔だけが覗いていた。荒作りではあつても、まぎれもない御仏の顔がこちらを向いていた。御仏を残して出た旅の最後に、いま京に入ろうとする彼女を御仏が迎えたまう。そう少女は感じなかつたであろうか。ただし、心躍らせてではない。旅が彼女を変えていたであろう。しかも、夕暮れの深くなるうとする刻限である。「あはれに、人離れて、いづこともなくておはする佛かなと、うち見やりて過ぎぬ」。

柳田國男が『野鳥雜記』で、直接には奥州のイタコのオシラ遊びに触れてではあるが、黄昏の感動について語っている。「もしこの物寂しい黄昏の感動が、自然に人の空想を死の國に誘うたものとしたら、それは我々がまだ子供の如く、爲すことも無くして静かな夕暮を過ごすことの出来た大昔から、さういふ心持を持續けて居たのである」(『定本・柳田國男集』第二十二卷 一〇七頁)。

たしかに、黄昏の感動というものがある。しかも、それは死の國にかかわるだけではない。黄昏の時刻には、一般に異界との回路が繋がる。白昼には感じられない異次元の気配がする。

まして、いまは、「かりそめなる」ものにせよ「きりかけ」によつてこちらから隔てられ囲まれた空間から、御仏の顔が少女に向け

られている。時間的にも空間的にも、彼女はその異質性を感じ取っていただろう。「いと荒う吹いた」風に乗つてか、御仏は異界から出現したもうた。その限り、荒作りの仏像がどんな仏の表現であつたにしろ、かりに『扶桑略記』が万寿四年(一〇二七年)三月一日の条で、沙門延鏡が「近江國志賀郡世喜寺」つまり関寺を供養して安置したと言っている「舊造五大彌勒菩薩像一軀」がそれであつたにしろ、なかつたにしろ、それは如来である。如来は自在に來る。夢のなかにも來る。

もっとも、彼女の夢に阿弥陀如来が現れるのは、先にも触れたように、はるか後年、天喜三年(一〇五五年)のことだ。ただ、その際も、軒先に出現した仏は「さだかには見え給はず、霧ひとへ隔たれるやうに、透きて見え給ふ」た。

それは、この旅のための門出の折りに、霧の濃く垂れ込めた夕暮れ、がらんとした屋内に浮かんだ葉師仏が少女の眼の奥に焼き付けた映像に似てはいないだろうか。また、この旅の終わろうとする陰曆の十二月の二日、つまり月明の期待できぬ闇の濃くなりつつある時刻に、切懸の向こうに浮かび出た荒作りの御仏の顔が少女の胸に残した表象に似てはいないだろうか。なるほど葉師仏は等身、荒作りの仏は丈六、そして夢の中の阿弥陀如来は「御丈六尺ばかり」と、仏の大きさこそ違うものの、彼女の側では、ほとんど同じ視覚がはたらいていたのではないだろうか。

後年の阿弥陀仏来迎の夢に自然に連なるようなものを、この十三歳の少女の旅がすでに用意していた。たしかに、まだ信仰とは言えない。まだ、とても厭離穢土・欣求浄土の志向とは呼べない。しかし、後年になっての、つまり『更級日記』記述時の付会として片付けられぬものを、少女はこの旅によって、その心に得ていた。それが冷たい風の吹き荒れる冬の日の黄昏、「あはれに、人離れて、いづこともなくておはする佛」との逢坂の体験に収斂して、後々まで糸を引くことになる。

### 暗 夜

黄昏の後に暗夜が来る。「いと暗くなりて、三條の宮の西なる所に着きぬ」。

京に待っていた実母を除けば、一家揃っての旅であった。家族の者以外にも、『更級日記』では「人々をかしがる」、「人々あはれがる」、「人々拾ひなどす」というように「人々」としかよばれていないが、供の者も多かったに違いない。その供の者ともかく、三ヶ月もの旅のなかでの肉親とのやりとりについて、この日記は何も記述していない。

出産後に病んだ乳母を見舞う場面で、その乳母が「いと戀しければ、行かまほしく思ふに、せうとなる人抱きてゐて行きたり」と、「せうとなる人」、つまり男の兄か弟、この場合は兄が、まるで少女

を抱いて乳母のところへ連れて行ってくれたのは誰でもよかったかのように、簡単に言及されているのが、唯一の例外である。父親の孝標も、兄も姉も、また継母も、この少女の旅の記憶のなかに深く入り込めなかった。

当時のこの程度の家庭で、乳母が幼い者に対して大きな心理的影響力を持っていたことは、わかる。菅原孝標家でも、子女にとって、旅の終わった次の春には疫病で死ぬことになるこの乳母が、肉親よりも身近な、親しい存在であったとしても、おかしくはない。だから乳母は別格としても、それでは肉親はどうしていたのか、たとえば遠江に入ったあたりで病いに臥すことになった少女に向かって、その記憶に留まるほどの、あるいは後に書きたくなるほどの態度を肉親は示さなかったのか、という類の疑問は残る。

ひとつの解釈は、少女が身の周りの現実の人間関係に示す関心のほとんど欠如と言っている、少なさということであろう。乳母にしても、見舞いの場面以降は登場しない。そして、あの場面の基調も、乳母への恋しさよりは、病んだ彼女の凄愴な姿を浮かび上がらせる月光の冷たさだったであろう。

そして、それ以降、少女が強い関心を示した現実の人間は、足柄山の麓に宿った「月もなく暗き夜の、やみにまどふやうなるに」「いづくよりもなく出で来た」った、年の頃は「五十ばかり」と「二十ばかり」と「十四五なる」三人の遊女のみである。その一人

について「髪いと長く、額いとよくかゝりて」という観察を少女はしているが、この場面の重点は一人の遊女の美しさではあるまい。三人の遊女が「さばかり恐ろしげなる山中」やまなかから忽然と現れては去って行った、また、彼女らによって夜闇のなかに束の間だが幻想的な時間と空間が開かれた、その異様さであろう。

しばらく後、美濃に入つて墨俣を過ぎ関ヶ原の手前に来かかった宿りの場に、「遊女ども出で来て、夜ひと夜、歌うたふにも、足柄なりし思ひ出でられて、あはれに戀しきことかぎりなし」と少女は思うことになるのだが、その「あはれに戀しき」思いの対象を、足柄山麓で行き逢つた現実の人間としての三人の遊女と解するのは間違いだらう。むしろ、あの異様な状況への少女の心の傾斜が問題になる。

乳母を見舞つた場面では月光が病人を照らし出し、足柄山麓の場面では月明のない闇黒のなから遊女たちが立ち現れては消えるという差はあるが、その状況が少女の日常をはるかに超えた異様なものだった点、そのような状況が彼女の心に大きく作用した点では、この二つの場面に基本的な差はない。そして、いよいよ京に入ろうとする逢坂山での、切懸を間に挟んでの仏との出会いの場面にも、同じ共通性がある。

現実の人間関係によりも、これらの異様な状況に少女の心が傾くなかで、物語の世界への彼女の憧憬も大きく変質しはじめていたの

ではないか。たしかに、入洛後の彼女は物語を貪り読む機会を得よう。しかし、はたして、「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかた」の上総で継母や姉から物語のところでどこを聞いたのと同じ心で、それらを読むことができるであろうか。

物語めいた伝説が『更級日記』中に二つ、かなり克明に書かれてはいる。ひとつは竹芝寺、もうひとつは富士川で聞いた話である。

だが、旅を重ねて近江に入り、折角「おきながといふ人の家に宿りて、四五日あり」ながら、そこに伝説が出てきていない。「おきながといふ人」は、近江国坂田郡息長村の豪族である。その家柄の古いことは、舒明天皇が「息長足日廣額天皇」とよばれたことから、見当が付く。おそらく、この当時も代々歴任した郡司の職に在つたはずである。とすれば、上総介を勤めた菅原孝標と交友関係にあつてもおかしくないし、四、五日の滞在なら、孝標の娘が当家の主人か他の家人から、この旧家に古くから伝承されてきた伝説なり物語なりを聞いても不自然でない。

その一事をもつて、少女がもう物語の世界への関心を失つていたなどと、私は主張したいのではない。ただ、この一事もまた、少女の憧憬の変質を窺わせるのではないかと思うのだ。

旅が少女の異界へのかかわりを強めたのは、まぎれもない事実であろう。そのかわりを通じて、彼女は自分の心のなかの闇の部分に気付きはじめていた。「あはれに、人離れて、いづこともなくて



おはする」という黄昏の感動は、ただ荒作りの仏像のみに向けられたものだったろうか。自らの心の暗夜に入って行く予感を、このとき、少女は抱かなかったろうか。

おそらく、その闇に分け入ることなしには、この現身の女性に救いは訪れまい。暗夜を通じてでなければ、光明は到来しまい。少女の旅は、その暗夜への導入でもあったのではないか。